

令和7年度 知的障害・発達障害児とその家族のQOLを維持する指示体制整備に向けた研究(こども家庭庁)

ICFシステムによる強みと合理的配慮の 把握に基づくQOL評価と支援について

分担研究報告(安達)

R8.1.5 第2回研究報告会

R7年度の研究

- 研究1

- 放課後等デイサービスを利用する2名の児と家族
- QOL支援ニーズが高い児と低い児の2名
- 家族と支援者がそれぞれの児についてICF-QOL評価票を実施

- 研究2a

- 成人ASD当事者を対象にICF-QOL評価票を実施
- a)ASD確定診断、b)知的発達症の合併なし、c)20歳以上
- ICF-QOL評価票を評価票に加えてWHOQOL26、WHOQOL-Disabilities、AsQolを実施。

現在の進捗

- 発達障害者支援センターへの依頼は不調。
 - 応答があったのは15センターのみ。そのうち4センターが研究協力同意。
 - センター紹介の4事業所に加え、2地域の児童発達支援連絡協議会に依頼
 - 発達障害当事者会に依頼し、研究協力の同意を得た方からの縁故で拡大
- 研究1
 - 現時点でデータ収集済みは6名の児（低QOL3名、高QOL3名）のみ
 - 現時点で上記に加えて6つの放課後等デイサービスに依頼している
- 研究2a
 - 現時点で、研究協力同意を23名から得ている。
 - 調査回答完了者は19名
 - 引き続き、リクルート中

本日の報告は研究2a

※但し、研究2aの結果の一部は、
「ASDの幸福学研究(研究代表者:内山登紀夫)」によるデータ

研究2aの方法

ICF-QOL質問票Part I（活動と参加）（I）

10-15歳の頃についてお答えください*

- ① 困難はなく環境調整支援がなくても生活上の不便やストレスはなかった
- ② 困難が軽減する環境調整支援があり生活上の不便やストレスはあまりなかった
- ③ 困難が多少軽減する環境調整支援はあるが生活上の不便やストレスはあった
- ④ 困難が軽減する環境調整支援がなく生活上の不便やストレスがかなりあった
- その他: _____

いま現在についてお答えください*

- ① 困難なく環境調整支援がなくても生活上の不便やストレスはない
- ② 困難が軽減する環境調整支援があり生活上の不便やストレスはあまりない
- ③ 困難が多少軽減する環境調整支援はあるが生活上の不便やストレスはある
- ④ 困難が軽減する環境調整支援がなく生活上の不便やストレスがかなりある
- その他: _____

この項目に係る環境調整支援（合理的配慮）の提供はQOLの向上につながると思えますか？*

- 思う
- 多少思う
- あまり思わない
- 思わない

配布資料（ICF-QOL質問票_活動と参加_説明文）に記載している30項目について、これら3つの質問を行っている。

ICF-QOL質問票Part I（活動と参加）（2）

パート1の回答全体についての質問（1）



「困難なく環境調整支援がなくても生活上の不便やストレスはない」（選択肢①）との回答となった項目は回答者（あなた）の「強み」と考えられます。回答者（あなた）が「強み」を発揮することで回答者自身（あなた自身）のQOL維持・向上につながっている生活場面は現在どの程度ありますか？ あてはまる○を選択してください。

パート1の回答全体についての質問（2）



「困難が軽減する環境調整支援があり生活上の不便やストレスはあまりない」（選択肢②）との回答となった項目にある「場面や支援」は「回答者（あなた）が必要とする合理的配慮」と考えられます。これら「合理的配慮」が提供されることにより回答者（あなた）のQOL維持・向上につながっている生活場面はいま現在の程度ありますか？ 当てはまる○を選択して下さい。

30項目×3質問に加え、最後に、パート1の回答全体についての質問として、左記の2つの質問を行っている。回答選択肢は、「十分に多少あった、あまりなかった、なかった、あった」の4択

パートIの各項目の説明文について

- 配布資料 (ICF-QOL質問票_活動と参加_説明文) を参照のこと。
- 各項目とも、当該項目の合理的配慮例を記載するとともに、当該項目にかかる合理的配慮の提供の程度と当該項目内容にかかる困難を感じる程度について評定を求めている。

ICF-QOL質問票Part2（環境因子）（1）

- 全体構成
 - パート2a【環境因子（周囲の人たち）】の観点によるQOL（生活の質）の評価
 - パート2b【環境因子（製品と用具）】の観点によるQOL（生活の質）の評価
 - パート2c【環境因子（感覚刺激）】の観点によるQOL（生活の質）の評価
- パート2aの回答画面（各項目3つの質問で構成）

10-15歳の頃）家族との関わりによるQOL状況はどうでしたか？ *

	そう思う	多少そう思う	該当しない
家族との関わりがQOLを上げていた	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
家族との関わりがQOLを下げていた	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>

いま現在）家族との関わりによるQOL状況はどうですか？ *

	そう思う	多少そう思う	該当しない
家族との関わりがQOLを上げている	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
家族との関わりがQOLを下けている	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>

家族に対して「本人支援の要点」を必要な範囲で助言することは生活全体のQOL * 上昇に効果があると思いますか？

「本人支援の要点」の助言とは、本人の①生活上の困りごとについての支援、②気持ちを支えるための支援、③困難特性の理解に基づく支援、④多様性を前向きに捉える支援の「必要性と支援の方法」をわかってもらうことです。

- 思う
- 多少思う
- あまり思わない
- 思わない

ICF-QOL質問票Part2（環境因子）（2）

- パート2aの回答全体への質問

パート2aの回答全体についての質問（1）



「心地よさや安心が得られる人たち」と関わる機会を自分から得られたり、周囲の人たちの配慮で作ってもらったりといったことは生活全体として10-15歳の頃どの程度ありましたか？ また、いま現在はどの程度ありますか？

パート2aの回答全体についての質問（2）



「緊張や不安感をもたらす人たち」との関わりを自分から回避できたり、周囲の人たちの配慮でなくしてもらったりといった機会は生活全体として10-15歳の頃どの程度ありましたか？ また、いま現在はどの程度ありますか？

- パート2b, 2cについても、各項目3つの質問で構成し、さらに、回答全体への質問も同様に設定
- パート2a, 2b, 2cの各項目の説明文と回答全体への質問は、配布資料（ICF-QOL質問票_環境因子_説明文）を参照のこと
- 各項目とも当該項目の環境因子例を明示するとともに、当該環境因子によるQOLの上昇と低下について説明して評定を求めている。

研究2aの結果（現時点19名の途中結果）

IF-QOL評価票パートI（活動と参加）①

- 配布資料 (R8.1.3_研究2a) 活動と参加_途中19名)に現時点での結果を30項目について示す。
- 10-15歳時の評価といま現在の評価の比較検討
 - 両時点でのデータをウィルコクソンの符号付き順位検定により比較。
 - a) 9項目で、過去評価より現在評価が困難軽減で現在の困難は低い。
(1, 2, 3, 4, 5, 10, 11, 15, 17)
 - b) 4項目は、過去より現在評価が軽減したが現在で40%以上が困難あり。
(19, 26, 28, 29)
 - c) 9項目は、過去と現在の評価に有意差なく、過去・現在評価とも40%以上困難あり。
(6, 12, 16, 20, 21, 22, 23, 25, 30)
 - d) 1項目は過去と現在で評価に有意差なく、過去よりも現在の困難が高い。
(24)
 - e) 残りの7項目は過去と現在評価に有意差なく、過去・現在とも困難ありが40%未満
(7, 8, 9, 13, 14, 18, 27) ; 但し、7, 18, 27は困難ありの%に要留意。

各回答カテゴリーの項目内容例（活動と参加）

- a) 日用品を使うこと(1)、食べることや飲むこと(2)、衣服の脱ぎ着や靴の脱ぎ履き(4)、手先の細かな動きで物を扱うこと(10)
- b) 家族以外の人と関わり合うこと(19)、ストレスや不安を伴う作業や活動を行うこと(26)、その場の求めやルール、社会的常識に応じて行動すること
- c) 買い物や簡単な家事をすること(6)、3人以上のグループで会話や話し合いをすること(16)、日課の段取りや遂行・調整をひとりで行うこと
- d) 日常の生活でお金を使うこと、お金の管理や貯蓄をすること(24)
- e) 歩く・走る・登るなど移動すること(8)、読んだり、書いたりすること(13)、計算すること(14) / 要留意項目 自分の健康闇の安全に注意すること、危険を回避すること(7)、計画立案・問題解決・意思決定(27)

IF-QOL評価票パート1（活動と参加）②

- 配布資料 (R8.1.3_研究2a) 活動と参加_途中19名) に示すように、「各項目に係る合理的配慮の提供がQOLの向上につながるかと思うか」との質問に対する回答は、ほぼ全項目で「思う」あるいは「多少思う」だった。
- 30項目にわたる「思う」の平均回答率は75.0% (±10.9%)
- 「多少思う」の平均回答率は19.6% (±7.8%)
- 「あまり思わない」の平均回答率は1.3% (±3.1%)
- 「思わない」の平均回答率は4.2% (±4.1%)

IF-QOL評価票パートI（活動と参加）③

- 配布資料（R8.1.3_研究2a）活動と参加_途中19名）に示すように、「強みの発揮」でQOLが維持・向上する生活場面（全体質問1）、「合理的配慮の提供でQOLが維持・向上する生活場面（全体質問2）は、過去よりも現在のほうが多くなっていた。（以下、19名の回答分布）

全体（1） 強みの発揮によりQOLの維持・向上につながる生活場面は？				
回答分布	十分にあった／ある	あった・ある	あまりなかった・ない	なかった／ない
10-15歳	3	6	6	4
いま現在	4	10	3	2
全体（2） 合理的配慮の提供によりQOLの維持・向上につながる生活場面は？				
回答分布	十分にあった／ある	あった・ある	あまりなかった・ない	なかった／ない
10-15歳	3	4	7	5
いま現在	6	10	2	1

IF-QOL評価票パート2(環境因子)①

- 配布資料(R8.1.3_研究2a)環境因子_途中19名)に現時点での結果を16項目について示す。
- 10-15歳時の評価といま現在の評価の比較検討
 - QOL+からQOL-の評定値を減算した結果をウィルコクソンの符号付き順位検定により過去と現在で比較。
 - a) 5項目で、過去から現在にかけて影響がプラスに有意にシフト。
(2a-3,4,6; 2b-1,2;)
 - b) 4項目は、過去も現在もマイナスの影響が継続。
(2a-5; 2c-1,2,4)
 - c) 2項目は、過去から現在にかけてマイナスの影響が軽減したがプラスには至らない。
(2c-3, 5)
 - d) 2項目は過去と現在で評価に有意差なく、一貫してプラスの影響。
(2b-3,4)
 - e) 残りの3項目は過去と現在評価に有意差なく、両時期とも小さなプラスの影響
(2a-1,2; 2b-5) ;但し、2a-1はプラマイの影響が拮抗。

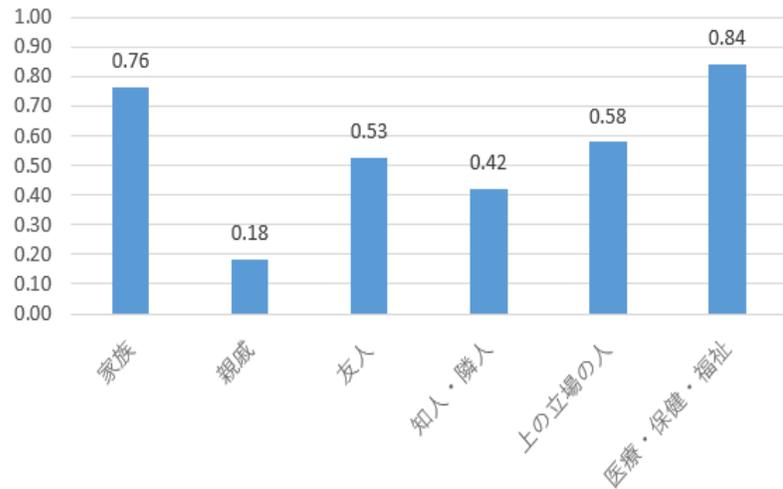
各回答カテゴリーの項目内容例（環境因子）

- a) 友人との関わり(2a-3)、医療・保健・福祉の専門職(2a-6)、食べ物や飲み物、医薬品(2b-1)、日々の生活で使う製品や用具(2b-2)
- b) 上の立場にある人(2a-5)、光刺激(2c-1)、音刺激(2c-2)、気温・湿度・気圧・天候(2c-4)
- c) 匂いや香り(2c-3)、振動や揺れ(2c-5)
- d) 遊びや余暇に使う製品と用具(2b-3)、パソコン・タブレット・携帯電話・テレビなどの情報機器(2b-4)
- e) 家族との関わり(2a-1; プラマイ拮抗)、親戚(2a-2)、学習や仕事に使う製品と用具(2b-5)

IF-QOL評価票パート2 (環境因子) ②

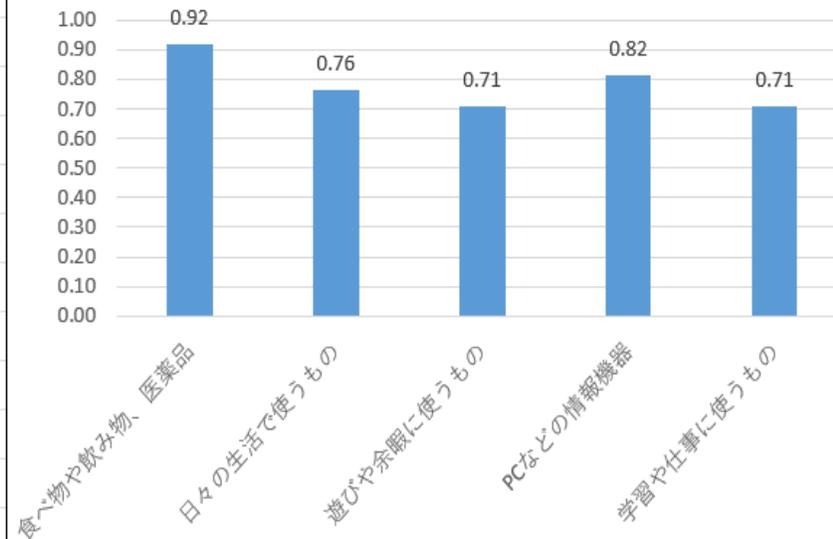
- 環境調整支援のQOL向上に対する有用性

本人支援の要点の助言はQOLに有用か？

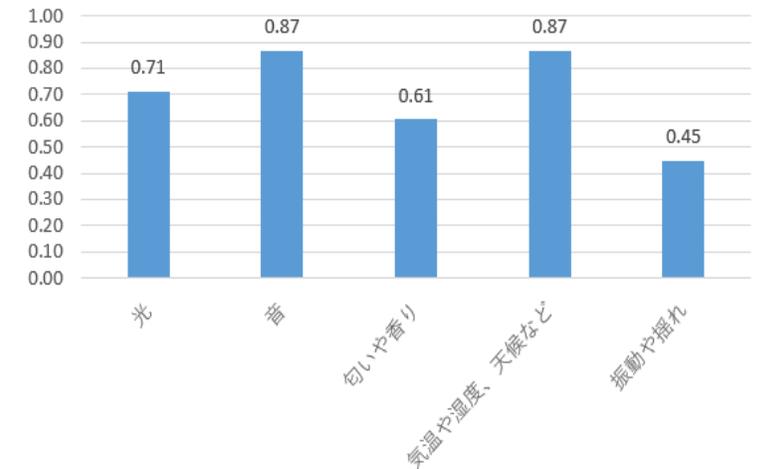


思う = 1、多少思う = 0.5
あまり思わない = -0.5、思わない = -1
と数値化して、個々のデータを変換後、
平均値を算出

これらに係る環境調整支援はQOLに有用か？



これらに係る環境調整支援はQOLに有用か？



IF-QOL評価票パート2(環境因子)②

・促進環境活用と阻害環境回避の状況

2a)周囲の人たち	促進環境活用		阻害環境回避	
	10-15歳	いま現在	10-15歳	いま現在
十分あった	2	6	5	0
あった	5	12	3	12
あまりなかった	4	1	2	3
なかった	8	0	9	4

2b)製品と用具	促進環境活用		阻害環境回避	
	10-15歳	いま現在	10-15歳	いま現在
十分あった	4	5	2	3
あった	5	12	4	9
あまりなかった	7	2	11	7
なかった	3	0	2	0

2c)感覚刺激	促進環境活用		阻害環境回避	
	10-15歳	いま現在	10-15歳	いま現在
十分あった	6	3	0	2
あった	4	10	4	12
あまりなかった	4	2	9	4
なかった	5	4	6	1

a,bの下位パートで、状況は10-15歳時で悪く、いま現在で良好。cの「活用」では両時期とも良好（薄灰色セル）。
 但し、いま現在でも、状況が良くない回答者が「活用」「回避」ともに存在している。
 活用 > (a : 5%、b : 1%、c : 32%)
 回避 > (a : 37%、b : 37%、c : 26%)

WHOQOL26の結果

- 19名のWHOQOLの結果は以下の通り

- 全体 3.13 (± 0.66)
- 身体的領域 2.96 (± 0.78)
- 心理的領域 3.11 (± 0.7)
- 社会的関係 2.94 (± 0.89)
- 環境 3.39 (± 0.68)

- WHOQOL26手引より

(全体以外はp.23-25の標準データの平均を算出)

- 全体 3.29 (± 0.46)
- 身体的領域 3.50
- 心理的領域 3.33
- 社会的関係 3.19
- 環境 3.24

成人ASD当事者の
WHOQOLデータは
標準データと比べて、
若干低めだが、
大きな差ではなく、
「環境」は標準データより高い。

小考察

活動と参加の結果(1)

- 「10-15歳」と「いま現在」のいずれかまたは両方で確認すると、ほとんどの項目が「困難ありでストレスを感じて」おり、QOL支援が求められる。困難あり評価(1or2)は10-15歳で21項目、いま現在で14項目
- 10-15歳の方で合理的配慮の提供がない項目が多い。
いま現在にかけて困難さが軽減していたとしても、過去のQOLは低い。
- 両時期とも困難の強い項目(カテゴリーb, c)は特性とリンクする項目内容で、合理的配慮提供ニーズが高い。特に項目6「買い物や簡単な家事をすること」は生活に直結すると考えられる。特性に応じた支援を「生活全般に渡って網羅的に展開すること」が必要。多領域連携の必要性。

活動と参加の結果(2)

- 項目に係る合理的配慮提供のQOL向上への影響については、ほぼすべての項目(94.6%)で「合理的配慮提供がQOLを向上させる」との回答。
- 「強みの発揮」「合理的配慮の提供」は10-15歳では否定的な回答が多かった(強み53%、配慮63%)。
いま現在は改善されているが、否定的な回答が「強み」で26%、「配慮」で16%程度ある。ライフコースの早い段階からの合理的配慮提供が重要。

環境因子の結果(1)

- 生活を阻害する環境因子は、感覚刺激全般そして上の立場にある人。感覚問題に対するアプローチは重要だが、一般性だけでなく個別性がある。成人ASD当事者の感覚問題エピソードから支援を立ち上げる必要。加えて「上の立場にある人」へのアプローチが大切。教育・労働との支援連携。
- 家族との関わりは、プラマイが拮抗して“影響小さい”との結果となっている。早期からの家族支援の必要性を示している。
- 遊びや余暇、情報機器はQOL向上に有用。好みに応じた余暇や遊びを生活の中で提供していくことの大切さ。
- 各項目に係る環境調整支援のQOL向上に対する有用性については、13項目で50%超えの肯定的回答。特に、「製品と用具」「感覚刺激」への環境調整支援が求められている。「周囲の人たち」は関わる人による。
- 促進環境活用と阻害環境回避は、10-15歳では状況は全体に悪く、今現在の方がよい。a,bは活用はあるが回避は少ない。cはほぼ同じ。

ICF-QOLとWHOQOL26の結果について

- ICF-QOL

- 一般集団のデータがないため推測にはなるが、「困難があってストレスを感じる」項目が多く、各項目の合理的配慮を求める程度が強いことから考えると成人ASD当事者の結果はQOLが高いとは言えない。

- ICF-QOLとWHOQOL26

- WHOQOLの成人ASD当事者の値は若干低めであったが、ICF-QOLの結果が低かったため、その対応については要検討
- これらの関係は現時点で未検討だが、成人ASD当事者のQOLの実態は、ICF-QOLの方が反映しているように思われる。
- 生活全般に渡る様々な側面について具体的に焦点化して確認していく方が、成人ASD当事者のQOLの実態をより正確に把握できる可能性。